シリーズ「発達に違いのある子どもたち」

市では、「障がいのある人、ない人にかかわらず　だれもがいきいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念としてさまざまな施策に取り組んでいます。

今回も、市内で子どもの発達支援に取り組まれているNPO法人「まいすてっぷ」から、発達に違いのある子どもたちについて市民の皆さんに正しく理解いただくために、文章を寄稿していただきました。

問合せ先　福祉課福祉政策係☎㉒1111（内線2814）

―吃音（きつおん）―

子どものコミュニケーション障がいは、早期に治癒していくものもあれば、症状が変化しながらも一生付き合う必要があるものもあり、障がいの程度や種類、子どもが生来持っている発達の特性や環境によって違ってきます。子ども専門の言語聴覚士のもとには、多くの養育者が「小学校に入学するまでに治したい」と相談に来られますが、実際のところ軽快はしても就学後も支援が必要であったり、成長とともに重度化してしまうものさえあります。

このようなコミュニケーション障がいの一つとして「吃音」があります。吃音はいわゆる「どもり」です。話そうとすると最初の音を繰り返す（わ、わ、わたし）、引きのばす（わーーたし）、なかなか出てこない（…わたし）といったものや、身体が固くなったり、身体の一部が勝手に動いてしまうなどの症状もあります。

他の人と同じように話したいのに、のどや口が金縛りにあったように言葉が出てこない。このような場合、周囲の人になぜそんな話し方をするのかと問われても、大人でも理由を自分で説明することは難しいものです。

吃音は、１００人に1人という割合（世界各国共通）で発症する、比較的身近なコミュニケーション障がいです。吃音症状をもつ子どもは、市内のどの小学校にも1人はいらっしゃるのではないでしょうか。症状が出始める年齢はばらつきがありますが、ほとんどは2、3歳に発症し、そのうち半数以上は自然に改善するという研究結果が出ています。しかし、約3～4割の子どもたちは改善が難しい吃音です。

吃音に関する研究は、日本はもちろん他の国でも進められていますが、発症の原因にはさまざまな説があり、まだ確定されていません。近年の双子の研究では、体質が70％環境が30％というような結果が出ており、また、人種や文化が違う世界中のさまざまな国で吃音の発症率は変わらないことからも、育て方のせいではないことがわかってきました。しかし、一度出始めた吃音症状に作用する環境の影響は大きく、周囲の理解がとても重要になります。

吃音症状は、吃音全体の問題のごく一部であり、その水面下には吃音を発することに対する恐れ、恥ずかしさ、罪の意識、不安、絶望、孤立、自己否定などの心理的な問題が大きくひそんでいます。吃音が出始めた頃には意識をすることがなかった周囲の反応を、時間が経過するとともに意識するようになり、どもるたびに向けられる周囲の視線、不快な表情やしっ責、言葉を言い直させられたり、ゆっくり言うように指摘されたりすることで、子どもは「何か悪いことをしているのではないか」と思うようになります。また、どもった話し方ばかりに注意を向けられ、本当に伝えたい事を聞いてもらえない不満や諦めが及ぼす心理面への影響は大きく、そのような状態が続くと子どもは失敗を恐れ、どもる言葉や場面を避けてどんどん孤立していくようになります。吃音症状に対して、からかったり、どもり方を真似することなどは、決してあってはならないことです。

吃音の子どもたちに必要なのは、どもっていても言いたいことを言える環境です。良い聞き手が多ければ多いほど安心して話すことができます。子どもに「ゆっくり言って」ではなく、周囲の大人が「ゆっくり話す」「ゆったり過ごす」ことで自然と子どもの話すスピードも変わってきます。「どもりながら話す」ことが、一つのコミュニケーション手段と考え、吃音症状に気を取られずに、子どもが心から伝えたい言葉を聞き取ってほしい、それが吃音の子どもたちの代弁者である私たちの願いでもあります。

※言語聴覚士＝ことばや聞こえ、コミュニケーション、認知、摂食嚥下（食べ方飲み込み方）などに問題がある人々に対して、医師を中心とする他の職種と連携し、個別のプランを立てて専門的立場から支援する国家資格の専門職。

＜参考文献＞
エビデンスに基づいた吃音支援入門・菊池良和／学苑社、特別支援教育における吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援・小林宏明・川合紀宗／学苑社、子どもの吃音Q&A親御さんの質問に答えて／NPO法人・全国ことばを育む会
NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援まいすてっぷより発信　cocomy.jp で検索